Ⅱ．＜研究ノート＞

１．　アイリッシュディアスポラとスポーツ研究

――オーストラリアを例に――

坂　なつこ

はじめに

アイルランド島（アイルランド共和国および北アイルランド）の歴史は移民の歴史でもある。キリスト教の伝播は多くの聖職者を伝道のために離島させ、英帝国の支配は囚人としてあるいは過酷な支配から逃れるために人びとを新天地へと向かわせた。だが、1845－55 年頃の大飢饉（Great Famine）による劇的な人口の減少と流出は、地域コミュニティを破壊し、伝統文化および娯楽の担い手を喪失させた。他方で、その結果現在世界に離散するアイルランド系の人びとには、近年グローバル社会におけるポジティブな意味もまた付与されてきた[1]。しかしながら、2008 年の経済破綻は失業率を 5%以下から 14%以上に上昇させ、以来約 39 万 7 千人が国外に移住した[2]。行き先はロンドン、オーストラリア、カナダ等が主流であり、特に好景気が続くオーストラリアには若い世代がワーキングビザを得て訪れるケースが多く、2011 年から一年間では約 4 万人が渡航し､そのうち約 5 千人が帰国せずに定住しているとされる。

従来の移民と異なるのは、高等教育により専門的技術､学位を持った若者層が移住していること、彼らがケルティックタイガーと呼ばれる 90 年代の好景気の前後生まれであり、移民や貧困の歴史と距離を置いた世代であることなどである。そこには､「移民の犠牲」といったネガティブなイメージではなく､「移民」は 1 つの選択肢と考えられる傾向がある。すでに多文化社会を本国で経験した若い移民世代は、本国社会にどのような影響をもたらすのだろうか、そして受け入れ国においてどのような文化を形成するのか。また、彼らにとってスポーツはどのような役割を持ちうるのか。このような関心から、特に近年の特徴であるオーストラリアを対象にアイルランド系移民とスポーツ研究の課題と今後の可能性について整理してみたい。

１．アイルランド的経験としての「移民」

アイルランドでは大飢饉によっておよそ 100 万人が死亡し、210 万人を超える人びとが国外へ流出したといわれている。1845 年には約 850 万人いた人口が、1851 年には 567 万まで減少した[3]。1966 年まで減少し続け（約 280 万人）、現在も全島合わせて 640 万人程度であり、大飢饉以前の数字までは回復していない。この時期の移民は、約 150 万人がアメリカに出航したとされ、カナダ 34 万人、英国 30 万人そして、オーストラリア 7 万人が渡航した。それらの人びとは移住した社会において過酷な生活を生き抜き、その後強固な基盤を形成し、政財界をはじめ様々な領域で多くの功績を残してきたといえる。現在、世界中に 8～7,000 万人いるといわれるアイルランド系には、例えばアイルランド系カトリック出身者として初のアメリカ大統領となった J. F. ケネディなどがおり、成功したアイルランド系移民の代表と考えられている[4]。

通常、「移民」とは客観的に人の移動を指し out-migration ／ in-migration あるいは、emigration（自国から他国へ）／immigration（他国から自国へ）がセットで用いられる[5]。しかし、アイルランドにおける移民の歴史は常に out-migration／emigration の歴史であり、国内においては 1921 年の独立以降においても何かし

ら「恥ずべき問題」あるいは「消し去りたい事実」と捉えられてきたという。そのような感情は、アイルランド文学や批評によく表れており、out-migration は常に in-migration よりも意味をもち、より広い過程の一部ではなく際だってアイルランド人的な現象と捉えられてきた。例えば、ノーベル賞作家 S. ヒーニーは、「以心伝心の国から（From the Land of Unspoken）」という詩の中で、次のように語る。

we are a dispersed people, whose history
is a sensation of opaque fidelity.
[僕たちは四散の民　その歴史は
ぼんやりとした愛着をよぶもの] [6)]

ここにはディアスポラとしての歴史を捉える複雑な感情が表れているといえるだろう。

K.ミラーは、しかしながら、このような感情は「移民の歴史」に通底しているわけではなく、19 世紀以降に特に顕著になるとする [7)]。それは、多くのカトリック系アイルランド人が移民としてアメリカに渡る過程と関連していている。アメリカにおいては、17 世紀から移住していたスコットランド系アイルランド人すなわち北部アルスターのプロテスタント系アイルランド人がいたが、大飢饉の前後に増加するカトリック系アイルランド人移民は、すでに社会的地位を築いていたプロテスタント系住民やアングロサクソン系からの差別や社会的確執などを経験する。彼らは新生活の過酷さにもかかわらず、母国の貧困に比べれば豊かな生活を送ることになる。ミラーは、「当然のことだが、あらゆる移民がふたつの国家の民であり、新世界での可能性と旧世界の記憶との間で引き裂かれている。だが、アメリカのアイリッシュほど、それがよくあてはまる、あるいは顕著な集団はほとんどいない」と述べている [8)]。母国を捨てた罪悪感と新大陸での希望と満足がない交ぜになり、強い感情となって語られていくのである。このような感情は、本国においては「移民」を「アイルランド人の運命」として甘受する精神へとつながっていく。P. Darby と D. Hassan は、「アイルランドで成長するということは、そこを去る準備をするということを意味した」と述べた D. Fitzpatrick を引用して、アイルランド人の集合意識が表れていたとしている [9)]。実際に、ほとんどのアイルランド人が移民した親戚や知り合いをもち、他方帰国する者は稀であった。「移民」がアイルランドに固有のものであるという経験は強化されていった。特に大西洋を挟んだアメリカは、「ティル・ナ・ノグ（永遠の若さの国）」神話と重ねられて語られる [10)]。このような言説が、アイルランド系移民にとっては「二度と帰れない母国」（一度もアイルランドに行ったことがない子孫にとっても）をノスタルジックに思い焦がれる対象としたのであり、そして、そのような歴史は英国帝国がアイルランド島にもたらしたものなのであって、つまり「移民」とは自らの選択ではなく、その意味で「避けられない」悲劇であり、残された人びとにとっては母国の悲劇に耐えられず逃避する人びとでもあった。

２．アイリッシュディアスポラ

このような言説にはっきりとした変化がみられるようになるのは 1990 年代からである。象徴的な出来事として、M. ロビンソン元大統領（在 1990－97 年）が、「7,000 万人のアイルランド系がアイルランドの文化的遺産を担っている」と述べた、1995 年の国会演説「Cherishing the Irish Diaspora」がよく知られている。ロビンソン元大統領は、いかに「アイルランド人」を規定するのが難しいか、また、そのために「領土」「国籍」「宗教」「祖先」などに規定されえない「アイリッシュディアスポラ」の遺産の豊かさを自覚し、生かすことが重要であると述べ、このころから「アイリッシュディアスポラ」という言葉が頻繁に使用されてくるようだ。

B. Walker は、この演説に加えて、D. Akenson

（*Irish Diaspora: A Primer*, P.D. Meany Co., 1993）による研究を挙げ、アカデミックの世界にも新しいアプローチが見られるようになったとしている[11]。Akenson は、宗教や場所に関係なくすべてアイルランド系であり、アイルランド＝カトリックといった一元的なアプローチによってつくられたステレオタイプを批判した[12]。

ロビンソン元大統領の演説と呼応するように、アイルランド国内における研究センターや移民博物館の設立、同様に海外における拠点の設立が始まるのがこの時期であり、移民の歴史への新たな光が投げかけられるようになる[13]。

そして、この時期は、アイルランド共和国の経済成長が見られるようになる時期でもある。宗教的、政治的に分断されてきたアイルランドや、それまでノスタルジアや貧困、エグザイルによって本国から切り離されてきた「移民」を、同じ「アイルランド人」であること、すなわちアイリッシュディアスポラの一員であると、内外において肯定的に捉えられるようになってきたともいえる。

３．オーストラリアにおける研究動向

３－１　アイルランド研究

実際には、アイルランド移民が階級的にも宗教的にも均質であったことはもちろんない[14]。階級や宗教の違いだけではなく、出国先、どの都市に、いつ到着したのか、どのような理由かなどによって、その経験は様々であった。とくに、オーストラリアにはその傾向が強く、例えば、南オーストラリアにおけるアイルランド系移民の移住はかなり遅くになってから進んだため、すでに確立されていたアングロースコティッシュ環境へ適応する必要があったことは、他の地域のアイルランド系移民とは異なるアイデンティティ形成をもたらしたとする研究や、1860－90 年代にクイーンズランド州に到着した移民は比較的裕福であり、大飢饉を逃れてきた移民やニューサウスウェールズ（NSW）の初期の移民と比べると、当初から多くがローカルコミュニティのリーダーとなり、クイーンズランド議会の最初のメンバーとなったといった考察がある[15]。また、E. Malcolm は、女性移民について研究しているが、オーストラリアのアイルランド移民の特徴の一つに、男性と同等かより多くの女性が渡豪した時期があったことを指摘しており、独身女性たちがよりよい機会を求めて移民し、現地では非常に強固なネットワークを形成したとする。彼女たちの送金が本国の家族や親戚の生活を支えていただけではなく、ネットワークがさらなる移民の受入を促すことで移民先でのアイルランド系コミュニティの形成に寄与したとする[16]。

オーストラリアに最初に入植が行われた 18 世紀後半から第二次世界大戦終了まで、英国及びアイルランド系の人びとは人口の大きな部分を占めていた。現在人口約 2,280 万人（2012 年現在）のうち、祖先にアイルランド系を挙げているのは 10.4％でありアイルランド生まれの人は約 9 万人居住しているが主流とはいえなくなっている[17]。

オーストラリアにおけるアイルランド研究は、絶対的な移民数の違いから、アメリカや英国と比較するとメインストリームとはいえなかった。しかしその中でも P. O'Farrell（1933-2003)は、NSW 大学でカソリック教会史のパイオニア的研究を行っており、1998 年には、M.マカリース元大統領（在 1997-2011 年）によって基金調達キャンペーンが着手され、2010 年にジョン・ヒューム･グローバルアイリッシュ研究センターが NSW 大学に設立された[18]。

Malcolm は、オーストラリアにおけるアイルランド研究が単にアイルランドやあるいはアイルランド人を対象としてだけではなく、「小さな英国の流刑地の集積が、どのようにして 200 年の間に永続的なネーションステートへと発展してきたか」を問うものであったと述べている。他方で、アイルランド研究の広がりにもかかわらず、そのほとんどは文学研究と歴史研究であったとしている。他方、学会としては、The Irish Studies

Association of Australia and New Zealand が、2001 年から雑誌 Australian Journal of Irish Studies を年に 1 巻ずつ発行している。論文タイトルからは、マルコルムの少々悲観的な批評にもかかわらず、スポーツ研究も含めた多様性が見られ今後の発展が期待される。

３－２　スポーツ研究とアイルランド移民

スポーツとアイルランド移民についての研究は、R. Cashman, *Paradise of Sport*, 1995、P. A. Mosely, R. Cashman, J. O'Hara, H. Weatherburn(eds), *Sporting Immigrant,* 1997（どちらも Walla Walla Press）、D. Adir, W. Vamplew, Sport in Australian History, 1997（Oxford University Press）などで触れられている [19]。オーストラリアはスポーツに熱心な環境が指摘されてきた。すでに 19 世紀には、冷笑的に「文化的砂漠(cultural desert)」などと評され、例えば作家 D. H. ローレンスは、オーストラリアを「ほとんど無言で、スポーツにとりつかれた野蛮人が住む巨大な国」であると考えていたという [20]。そのようなスポーツ環境について、Horton は、次のように指摘している。すなわち英帝国の旧植民地における英国文化の遺産であり、かつスポーツが常に階級や社会的ステータスの問題を伴いながら、「コミュニティアイデンティティ」を構築する過程の中心にあり、それゆえそれぞれの移民コミュニティにとってスポーツが果たす役割は大きなものであるが、「英国文化」という標識は、とりわけカトリック系のアイルランド移民にとっては、それに対して自らのアイデンティティを確立させるための重要なシンボルでもあったといえる [21]。他方で、そのような傾向が強いために、アイルランド系移民をめぐるスポーツ研究は、カトリックアイデンティティやエスニシティの側面からのアプローチが多く、例えば、O'Farrell は、プロテスタント系やアルスター出身についてはほとんど扱っていないために、彼らがどのようにスポーツ活動に携わっていたかという点についてはほとんど言及されていない [22]。数少ない例としては、A. Bairner によるアイルランド系のクリケット選手の研究があるが、クリケットがイングランド文化や中流階級文化に関連づけられることから、アイルランド系移民にとってコンフリクトを内包しながら、アイリッシュネスを維持しつつ「良きオーストラリア人」への道を探る過程であったことを考察している [23]。Walker は、カトリック系は確かにマジョリティではあるが、プロテスタント系やアルスター出身の移民が社会的には地位が高く、重要な役割を担っていることが多く、未開拓なこの部分の研究が今後進むことが望まれると述べている。

４．オーストラリアンフットボールとゲーリックゲームス

４－１．オーストラリアンフットボール

オーストラリア（およびニュージーランド）においてゲーリックゲームスが組織化されるのは、移民の数に比較すると遅い。ゲーリックゲームスはアイルランド系以外にはほとんど普及しなかったといえる。オーストラリアで発展するフットボールコードは、メルボルンを中心に独自の形態をとることになる。ゲーリックゲームスが起源であるともいわれるが、P. A. Horton は、それは間違いでありイングランドやスコットランドのいくつかのローカルルールから派生したものであるとする [24]。だが、Horton は、アイルランド系移民はオーストラリアンフットボールの創設には直接関わってはいなかったが、その後の隆盛に大きな役割を担っていたとする。メルボルン郊外に定住したアイルランド系移民の階級対立やエスニックアイデンティティの対抗意識が、フットボールチームへと投影されたとする。例えば、メルボルンの Collingwood はカトリック系アイルランド労働者階級のチームであると考えられてきた [25]。

オーストラリアンフットボールは、クリケット

と同じオーバルのグラウンドで行われ、ボールの形状も楕円形であるなど異なる点があるにもかかわらず、ボールを手で扱うことや戦略的には似通った部分も多いことから、アマチュアであるアイルランドのゲーリックゲームスから、プロのオーストラリアンフットボールリーグ（AFL）へと移籍するケースが増加してきた。1980 年代になると、AFL による積極的なゲーリックゲームス出身選手のリクルートが始まる。AFL へ移籍した Jim Stynes（1966-2012 年）の活躍により、The Irish Experiment と呼ばれるリクルート活動がいっそう積極的に進められるようになった [26]。現在も The Irish Experiment は、同じくアイルランド出身の Tadhg Kennelly（1982 年生）を中心に行われている。GAA にとっては「引き抜き」であり強い反発もみられるが、とりわけ経済破綻以降、プロ選手として活動できることに対する肯定的意見もきかれる [27]。

４－２．ゲーリックゲームス

ゲーリックゲームスは、アイルランド系移民によってプレイされてきたがアイルランド系以外に広く普及することはなかった。しかし、1920－30 年代アイルランド系移民が定住したメルボルンとシドニー間で試合が行われ、この頃ビクトリア州と NSW 州で協会が設立された。その後、1963 年になると南オーストラリア州（SA）と西オーストラリア州（WA)、クイーンズランド州で協会が設立され、1971 年に NSW、ビクトリア州、SA が参加して最初の州間大会が行われた。1974 年に NSW、ビクトリア、SA、WA がオーストラリア GAA を形成し、続いてニュージーランドのオークランドとウェリントンが加わる。メルボルン郊外には、1985 年に 2 つの専用グラウンドとクラブハウスを併設したゲーリックパークが設立された。寄付と政府予算によってつくられ、1992 年にロビンソン元大統領が、1998 年にマカリース元大統領が訪問している。競技人口は、近年のアイルランド系移民の再増加（特に WA）や異なるエスニックグループからの新しいスポーツへの関心から、徐々に増えつつある。しかしながら、ワーキングビザが切れたり、本国の経済状況が好転すれば帰国したりする選手が多く、安定したクラブ運営のためには様々な障害もみられる。

おわりに

Cashman が述べているように、オーストラリアにおけるスポーツは、英国－アイルランド系移民がもたらした文化遺産を受け継ぎながらも、独自の発展を遂げてきた [28]。多くのアイルランド系はネットワークとアイリッシュアイデンティティを維持しながらも、他方でスポーツを通じて「良きオーストラリア人」としてのあり方を模索していくという側面も見られる。Horton は、ここに N. エリアスの描いた「定住者とアウトサイダー」関係の力学を見いだしている [29]。だが、この関係の力学が、スポーツを通じては、アイデンティティを排他的に強化していくというよりは、極端なセクト主義や排他主義をある程度回避していくのはなぜなのか、アイルランド系移民内部の力学はどのように働いたのか、さらに、どのように他の移民コミュニティとの関係は位置づけられるのかなど、まだ十分に考察されていない [30]。さらに、近年のオーストラリアにおけるアジア系移民の増大により、スポーツに表象されてきた「アングローケルト系」としてのアイデンティティはどのように変容していくのかなど、また、帰国した移民が本国に与える影響などの課題が考えられる。また、近年のリベラルナショナリズム論と交差して、スポーツにおける排他的愛国主義的情動が当然視される言説も多いが、そうではないスポーツのありかたの一端がここでは表れているとも考えられ、示唆的である。本稿で言及できなかった他のスポーツにおいて、アイリッシュディアスポラがどのように表象されてきたのかについては別稿で考察したい。

【注】
1）立川健二、『ポストナショナリズムの精神』現代書館、2000 年。
2）失業率は共和国。国外移住人口は 2013 年 8 月現在。また、すべてがアイルランド国籍ではない。
M. Gilmartin, Changing Ireland, 2000-2012: immigration, emigration and inequality, Irish Geography, 2013(DOI:0.1080/00750778.2013.794323)
3）佐藤郁、「アイルランドからアメリカへ－移民の歴史と経験」『東洋大学国際地域学研究』5 号、2002 年、74 頁。
4）2011 年現在、共和国は 4,588,252 人（Ireland Central Static Office）、北アイルランド 1,824,000 人（2012 年、Northern Ireland Statics and Research Agency)となっている。アイルランド共和国憲法による市民権を得られるのは、祖先がいる場合、次のように定めている。
［A］両親がアイルランド市民、あるいは一定の条件を満たす場合にアイルランド島で誕生した子ども、［B］A の子どもが国外で生まれた場合、［C］B の子ども、あるいは A の孫が国外で生まれた場合、［D］C の子ども、あるいは A のひ孫が国外で生まれた場合。但し、いくつかの条件が付く。
http://www.inis.gov.ie/en/INIS/Pages/WP11000024
5）The Oxford Companion to Irish History(2nd), 2002 p.179.
6）S. Heaney, The Hau Lantern, pp.18-19.（『シェイマス・ヒーニー全詩集 1966～1991』村田辰夫他訳、国文社、1995 年、570 頁。
訳者解説では、「広い意味で（中略）イギリスを代表する詩人と呼んでもよいのではないか」（888 頁）と評されているが、ヒーニー氏の出生地（北アイルランド）を捉えてそう書かれているとすると、あまりにも政治的、歴史的に無頓着な解釈であるといわざるを得ない。ヒーニー氏が The Penguin Book of Contemporary British Poetry に収容されることを拒否したときの返信に、「Be advised my passport is green. No glass of ours was ever raised To toast the Queen」（"An Open Letter" , 1983）としるしたことはよく知られている。ヒーニー氏は、2013 年 8 月 30 日に 74 才で急逝された。氏が長年居住したダブリンで行われた葬儀には、共和国大統領、首相をはじめ、多くのアイルランドを代表する著名人が参列し、さながら国葬のようであった。葬儀は、地元テレビ局のウェブサイトを通じて、世界中に同時配信された。ノーベル賞作家としての知名度だけではなく、北アイルランド出身で、英語とアイルランド語を駆使してアイルランド島の自然や大地を詩に読み続けたヒーニー氏が、世界中のアイリッシュディアスポラにとっていかにシンボリックな存在であったかを表しているのではないだろうか。ご冥福をお祈りしたい。
7）K. ミラー／P. ワグナー『アイルランドからアメリカへ 700 万アイルランド人移民の物語』東京創元社、1998 年、16 頁。
8）K. ミラー／P. ワグナー、12 頁。
9）P. Darby/D. Hassan, Introduction: Locating Sport in the Study of the Irish Diaspora, Sport in Society: Cultures, Commerce, Media, Politics, vol. 10, No. 3, 2007, p. 333.
10) K. ミラー／P. ワグナー、15 頁。
11) B. Walker, ' The Lost Tribes of Ireland': Diversity, Identity and Loss Among the Irish Diaspora, Irish Studies Review, vol. 15, no. 3, 2007, p. 267.
12) Akenson は、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドにおける、カトリック系アイルランド移民の社会移動を考察し、カトリック系・プロテスタント系にかかわらず、社会移動や社会的成功は可能であったことを明らかにして、それまでのカトリック系アイルランド移民の悲劇的言説を批判した。他方、そのようなアイリッシュアイデンティティの「一元化」あるいはエスニックアイデンティティを生誕地によって決定することについても批判がある。L. J. McCaffrey, The Irish Catholic Diaspora in America, CUA Press, 1997.
13）これはまた新たな観光資源の発掘でもある。2013 年、観光局（Fáilte Ireland ）を中心として、The Gathering というキャンペーンが展開されている。これは、世界中に離散するアイリッシュディアスポラにアイルランド訪問を呼びかけるものであり、多くのイベントがこれに関連されて催される。とりわけ、コミュニティベースが強調されている。例えば、ゴールウェイでは国際ハーリング大会が開催され、北米、英国、ヨーロッパ、アジア、オーストラリアから、チームが参加する。
14） A. Bairner, Wearing the Baggie Green: the Irish and Australian Cricket, Sport in Society, vol.10, no. 3, 2007, p. 458.
15）E. Richards, Irish Life and Progress in Colonial South Australia, Irish Historical Studies, Vol. 27, No. 107 , 1991, p. 216.
M. E. R. MacGinley, The Irish in Queensland: An Overview, The Iriish Emigrant Experience in Australia, J. O'Brien, P. Travers (eds), Poolbeg, 1991.
16）E. Malcolm, Irish Diaspora and its Legacy, Up Close (http://upclose.unimelb.edu.au), 2010.
17）2011 年の国勢調査。祖先から二つのナショナリティを選択する。その他では、以下のようになっている。イングランド(36.1%)、オーストラリア(35.4%) 、スコットランド(8.9%)、イタリア(4.6%)、ドイツ(4.5%) 中国(4.3%)、アボリジナル(0.58%)、ウェールズ(0.57%) 。および Irish Echo, 25 June, 2012.
18）P. O'Farrell, The Irish in Australia, Univ of Notre Dame Press, 1989.
19）オーストラリア研究およびスポーツ研究については、尾崎正峰「オーストラリアにおける『ラグビー』の拡大と分裂」『一橋大学スポーツ研究』vol. 29, 2010 年、「スポーツ、移民、エスニシティーオーストラリアの研究動向から」『一橋大学スポーツ研究』vol. 24, 2005 年。小林勝法「植民地社会のエートスとスポーツ－オーストラリアとニュージーランドの場合－」『文教大学国際学部紀要』第 1 巻、1991 年。
20) P. A. Horton, The‘green’and the‘gold’: the Irish - Australians and their role in the emergence of the Australian sports culture, The International Journal of the History of Sport, Vol. 17, Issue 2-3, 2000, p.66.
21）Horton, p. 71.
22）Walker, p.271.
23）Bairner, p.457.
24）Horton, p. 75.
25）Anthony Hughes, The Irish Community, Sporting Immigrant Sport and Ethnicity in Australia, P. A. Mosely, R. Cashman, J. O'Hara, H. Weatherburn (eds)Walla Walla Press, 1997, p. 77.
26）The Irish Times,21 March 2012.
http://www.irishtimes.com/blogs/generationemigration/2012/03/21/jim-stynes-possibly-the-greatest-irish-emigrant-of-them-all/
Stynes は、非オーストラリア出身選手として唯一、AFL の個人賞であるブラウンロウメダルを獲得するなど非常に人気のある選手だったが、2012 年 3 月に 45 才でガンで亡くなる。「最も成功した移民」とオーストラリアンフットボールにおける彼の業績を讃えている。ブラウンロウメダルは正式には The Charles Brownlow Trophy。シーズンを通して「最もフェアで素晴らしい」選手に、公式審判らの投票によって与えられる。
27）The Irish Times, 9 December 2009. ここでは、トップ選手になるとトレーニングと仕事との両立が負担となり、バーンアウトが GAA において問題となっていることが取り上げられている。また、GAA は、過疎対策委員会を立ち上げ対応策を検討している。
28）R. Cashman, Paradise of Sport, Walla Walla Press, 1995, p.41.
29）Horton, p. 68.
30）セクト主義が無かったわけではない。D. Adir, W. Vamplew, p.73.